

7.1 [土]	第199回 土曜マチネーシリーズ 東京芸術劇場コンサートホール／14時開演 Saturday Matinée Series, No. 199 Saturday, 1st July, 14:00 / Tokyo Metropolitan Theatre
7.2 [日]	第199回 日曜マチネーシリーズ 東京芸術劇場コンサートホール／14時開演 Sunday Matinée Series, No. 199 Sunday, 2nd July, 14:00 / Tokyo Metropolitan Theatre

指揮／小林研一郎 (特別客演指揮者)
Special Guest Conductor KEN-ICHIRO KOBAYASHI P.5

チェロ／遠藤真理 (読響ソロ・チェロ) Cello MARI ENDO (YNSO Solo Cello) P.8

コンサートマスター／小森谷巧 Concertmaster TAKUMI KOMORIYA

ドヴォルザーク チェロ協奏曲 ロ短調 作品104 [約40分] P.10
DVOŘÁK / Cello Concerto in B minor, op. 104

- I. Allegro
- II. Adagio ma non troppo
- III. Allegro moderato

[休憩 Intermission]

チャイコフスキー 交響曲 第3番 ニ長調 作品29 〈ポーランド〉 [約45分] P.11
TCHAIKOVSKY / Symphony No. 3 in D major, op. 29 “Polish”

- I. Introduzione e Allegro : Moderato assai – Allegro brillante
- II. Alla tedesca : Allegro moderato e semplice
- III. Andante : Andante elegiaco
- IV. Scherzo : Allegro vivo
- V. Finale : Allegro con fuoco

[主催] 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
[助成] 文化庁文化芸術振興費補助金 (舞台芸術創造活動活性化事業)
[事業提携] 東京芸術劇場



7.7 [金]	第604回 名曲シリーズ 東京芸術劇場コンサートホール／19時開演 Popular Series, No. 604 Friday, 7th July, 19:00 / Tokyo Metropolitan Theatre
---------	---

指揮／飯守泰次郎 Conductor TAJIRO HIMORI P.6

ピアノ／ネルソン・フレイレ Piano NELSON FREIRE P.8

コンサートマスター／長原幸太 Concertmaster KOTA NAGAHARA

ブラームス ピアノ協奏曲 第2番 変ロ長調 作品83 [約46分] P.12
BRAHMS / Piano Concerto No. 2 in B flat major, op. 83

- I. Allegro non troppo
- II. Allegro appassionato
- III. Andante
- IV. Allegretto grazioso

[休憩 Intermission]

ワーグナー 舞台神聖祭典劇〈パルジファル〉から
第1幕への前奏曲 [約13分] P.13
WAGNER / “Parsifal” Vorspiel

ワーグナー 舞台神聖祭典劇〈パルジファル〉から
“聖金曜日の音楽” [約11分]
WAGNER / “Parsifal” Karfreitagszauber

ワーグナー 楽劇〈ワルキューレ〉から“ワルキューレの騎行” [約5分] P.14
WAGNER / “Die Walküre” Walkürenritt

ワーグナー 歌劇〈タンホイザー〉序曲 [約14分]
WAGNER / “Tannhäuser” Overture

[主催] 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
[助成] 文化庁文化芸術振興費補助金 (舞台芸術創造活動活性化事業)
[事業提携] 東京芸術劇場

※本公演では日本テレビ「読響シンフォニックライブ」の収録が行われます。



7.12 [水]

第570回 定期演奏会
東京芸術劇場コンサートホール／19時開演
Subscription Concert, No. 570
Wednesday, 12th July, 19:00 / Tokyo Metropolitan Theatre

指揮／鈴木秀美 Conductor HIDEMI SUZUKI P.7

ホルン&トランペット／ダヴィッド・ゲリエ
Horn & Trumpet DAVID GUERRIER P.9

コンサートマスター／小森谷巧 Concertmaster TAKUMI KOMORIYA

ハイドン 歌劇〈真の貞節〉序曲 [約7分] P.15
HAYDN / "La vera costanza" Overture

ハイドン ホルン協奏曲 第1番 ニ長調 [約17分]
HAYDN / Horn Concerto No.1 in D major

- I. Allegro
- II. Adagio
- III. Allegro

ハイドン オラトリオ〈トビアの帰還〉序曲 [約6分]
HAYDN / "Il ritorno di Tobia" Overture

ハイドン トランペット協奏曲 変ホ長調 [約13分]
HAYDN / Trumpet Concerto in E flat major

- I. Allegro
- II. Andante
- III. Finale : Allegro

[休憩 Intermission]

ベートーヴェン 交響曲 第7番 イ長調 作品92 [約36分] P.18
BEETHOVEN / Symphony No.7 in A major, op.92

- I. Poco sostenuto - Vivace
- II. Allegretto
- III. Presto
- IV. Allegro con brio

[主催] 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
[助成] 文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術創造活動活性化事業）
[協力] アフラック
[事業提携] 東京芸術劇場



Maestro of the month

今月のマエストロ

小林研一郎

(特別客演指揮者)

Ken-ichiro Kobayashi

炎のコバケンが聴かせる
哀愁のスラヴ魂



©読響

読響と厚い信頼で結ばれた特別客演指揮者が、ドヴォルザークのチェロ協奏曲とチャイコフスキーの交響曲第3番〈ポーランド〉で熟達の腕を振るう。傑作・チェロ協奏曲を弾く読響ソロ・チェロ奏者の遠藤真理との共演も注目だ。

1940年福島県いわき市出身。東京芸術大学作曲科および指揮科を卒業。74年第1回ブダペスト国際指揮者コンクール第1位、特別賞を受賞。ハンガリー国立響の音楽総監督をはじめ、チェコ・フィル常任客演指揮者、日本フィル音楽監督など、国内外の数々のオーケストラのポジションを歴任。2002年5月の「プラハの春音楽祭」オープニングコンサートの指揮者に、東洋人として初めて起用されたほか、ハンガリー政府から民間人最高位の“星付中十字勲章”を授与された。11年文化庁長官表

彰受賞。13年旭日中綬章を受章。

ハンガリー国立フィル、日本フィルおよび名古屋フィルの桂冠指揮者、九州響の名誉首席客演指揮者、東京芸術大学、東京音楽大学およびリスト音楽院（ハンガリー）の名誉教授。東京文化会館の音楽監督、長野県芸術監督団のメンバーも務めている。

録音では読響とブラームスの交響曲全集に取り組み、4枚のCDが発売され、いずれも絶賛を博している。

◇7月1日 土曜マチネーシリーズ
◇7月2日 日曜マチネーシリーズ

飯守泰次郎

Taijiro Imori

欧州歌劇場育ちの巨匠
ワーグナーの精髓に迫る

ドイツ・バイロイト歌劇場で活躍し、日本におけるワーグナー解釈の第一人者が、3年ぶりに読響の指揮台に立つ。〈パルジファル〉や〈タンホイザー〉の演奏から、どれほど霊妙で荘厳な音楽を聴かせてくれるだろうか。

1940年旧満州・新京生まれ。桐朋学園を卒業後、64年から70年まで読響の副指揮者を務め、その後、76年まで指揮者を務めた。67年からはマンハイム市立歌劇場やハンブルク州立歌劇場などの指揮者を歴任。72年のバルセロナ歌劇場〈さまよえるオランダ人〉〈ワルキューレ〉で同歌劇場のシーズン最高指揮者賞を受賞した。

70年からはバイロイト音楽祭の音楽助手として数々の公演に携わり、当時のヴォルフガング・ワーグナー総監督から「飯守泰次郎こそドイツ語でKapellmeister（カペルマイスター）と呼ぶにふさわしく、



©読響

そこには“マエストロ”という言葉以上に大きな尊敬の念が込められている」と絶大な信頼を得た。

90年代以降は国内で名古屋フィル、東京シティ・フィル、関西フィルの常任指揮者を歴任。現在は新国立劇場オペラ部門芸術監督、東京シティ・フィルおよび関西フィルの桂冠名譽指揮者。これまでにサントリー音楽賞、大阪市民表彰、日本芸術院賞などを受賞。2004年11月紫綬褒章、10年11月旭日小綬章をそれぞれ受章。12年度文化功労者。日本芸術院会員。

◇ 7月7日 名曲シリーズ

鈴木秀美

Hidemi Suzuki

古典派で近年高い評価
読響に2度目の客演

オリジナル楽器による演奏で評価の高い指揮者・チェロ奏者が、得意のハイドンとベートーヴェンでその真価を問う。読響への2度目の客演で、古典派解釈の新たな息吹をオーケストラに吹き込むことができるか。

1957年神戸生まれ。チェロを井上頼豊、安田謙一郎、指揮を尾高忠明、秋山和慶に学んだ。桐朋学園大学卒業後、オランダのデン・ハーグ音楽院に留学し、バロック・チェロの巨匠ビルスマに師事。ブリュッヘンが設立した「18世紀オーケストラ」やクイケン率いる「ラ・プティット・バンド」に在籍し、1994～2000年までブリュッセル王立音楽院でバロック・チェロの教授も務めた。

2000年に帰国した後、兄の鈴木雅明が設立した「バッハ・コレギウム・ジャパン」の首席チェロ奏者を務めるかたわら、ソリスト、室内楽奏者としても活躍



©K.Miura

し、日本人として初めてオリジナル楽器によるバッハ〈無伴奏チェロ組曲〉を録音した。

01年古典派を専門とするオリジナル楽器オーケストラ「オーケストラ・リベラ・クラシカ」を設立し、音楽監督に就任。ハイドンの交響曲などを中心としたレパートリーで高い評価を得ており、ライブ録音も発売されている。また、首席客演指揮者を務める山形響をはじめ国内各地のオーケストラ、海外ではポーランド、ベトナム、オーストラリアのオーケストラにも指揮者として客演している。

◇ 7月12日 定期演奏会



©中山かつみ

チェロ 遠藤真理

Cello Mari Endo

2017年4月から読響のソロ・チェロ奏者に就任した若手の実力派。今回、ドヴォルザークのチェロ協奏曲で、ソリストとしての腕前を披露する。

横浜市出身。東京芸術大学を卒業後、ザルツブルク・モーツァルテウム音楽大学に学んだ。2003年日本音楽コンクール第1位、06年「プラハの春」国際音楽コンクール第3位。06年にリサイタルデビューし、09年に齋藤秀雄メモリアル基金賞を受賞した。これまでにウィーン室内管やプラハ響のほか、国内の主要オーケストラと共演。また室内楽奏者としても活躍している。

◇ 7月1日 土曜マチネシリーズ
◇ 7月2日 日曜マチネシリーズ



©Hennek

ピアノ ネルソン・フレイレ

Piano Nelson Freire

ブラジルが誇るピアノの巨匠。古典派とロマン派を中心としたレパートリーで世界的に高い評価を得ている。今回は得意とするブラームスのピアノ協奏曲第2番を弾く。

1944年ブラジル生まれ。58年にウィーンに留学し、名ピアノ教師のザイドル・ホーファーに師事。60年代初めから欧米で広く活躍し、ヨッフム、小澤征爾、ブーレーズ、マゼール、マズアらの指揮で、ベルリン・フィル、バイエルン放送響、ロンドン響、パリ管、ニューヨーク・フィルなどと共演。録音もアルゲリッチとの2台ピアノの共演など多数ある。

◇ 7月7日 名曲シリーズ



ホルン&トランペット ダヴィッド・ゲリエ

Horn & Trumpet David Guerrier

ホルンとトランペットの両方で活躍する型破りな演奏家が、読響に初登場。一晚の公演でハイドンのホルン協奏曲ニ長調とトランペット協奏曲変ホ長調のソロを吹くという離れ業を披露する。

1984年フランス・ピエールラット生まれ。7歳でトランペットを始め、リヨン国立高等音楽院に学んだ。19歳でミュンヘン国際音楽コンクールのトランペット部門で優勝したが、同時期にホルンを学び始め、すぐにフランス国立管の首席奏者に^{ばってき}抜擢された。これまでにC.デイヴィス、ハイティンク、アシュケナージ、ブーレーズらと共演し、多数の録音がある。

◇ 7月12日 定期演奏会

7.1 [土]

7.2 [日]

柴田克彦 (しばた かつひこ)・音楽ライター

ドヴォルザーク チェロ協奏曲 ロ短調 作品104

作曲：1894～1895年／初演：1896年3月19日、ロンドン／演奏時間：約40分

チェコ国民楽派の大家アントニン・ドヴォルザーク（1841～1904）が残したチェロ協奏曲の最高峰。音楽院の院長としてアメリカ滞在中に書かれた交響曲〈新世界から〉、弦楽四重奏曲〈アメリカ〉と並ぶ傑作でもある。作曲のきっかけは同郷のチェリスト、ヴィーハンの渡米前の交流。滞在末期の1894年11月～95年2月に作曲され、帰国後に修正が加えられた。

曲は、哀愁に満ちた雄大かつ情熱的な旋律と展開が聴きどころ。アメリカの伝統音楽の要素と故郷ボヘミアの民俗色を融合させた曲想は、〈新世界から〉等と共通しているが、郷愁の度合いはグンと強まっている。大きな特徴はシンフォニックなオーケストラの扱い。複数の主題をクラリネットが提示し、トロンボ-

ンとチューバが重心の低い響きを作り出すなど、管楽器陣の活躍も目覚ましい。チェロは朗々と歌い、技巧的な見せ場＝難所も多いが、カデンツァはなく、管弦楽との一体感が重視されている。

なお、第2楽章中間部の主題は、初恋の女性ヨゼフィーナ（妻の姉）が好んだ歌曲〈ひとりにして〉に基づいており、95年5月の彼女の死に際して、第3楽章終結部にもその旋律が加えられた。

第1楽章 アレグロ 冒頭の第1主題、ホルンが出す第2主題を軸にした壮大な音楽。

第2楽章 アダージョ・マ・ノン・トロppo 叙情的な望郷の歌。

第3楽章 アレグロ・モデラート 力強い主要主題に二つの副主題が絡む、民俗色の濃い終曲。

楽器編成／フルート2（ピッコロ持替）、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン3、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器（トライアングル）、弦五部、独奏チェロ

チャイコフスキー 交響曲 第3番 ニ長調 作品29 〈ポーランド〉

作曲：1875年／初演：1875年11月7日（露暦）、モスクワ／演奏時間：約45分

ロシアの巨匠ピョートル・イリイチ・チャイコフスキー（1840～93）は、創作活動の初期から交響曲に取り組み、ペテルブルグ音楽院卒業翌年の1866年に第1番〈冬の日の幻想〉、72年に第2番〈小ロシア〉を完成。続いて75年6～7月に、全6曲の番号付き交響曲のうち、前期の最後にあたる第3番を作曲した。当時は、ピアノ協奏曲第1番完成の直後、バレエ〈白鳥の湖〉作曲の直前という上昇期。同年の初演は好評を得られなかったものの、チャイコフスキー自身はリムスキー＝コルサコフ宛ての手紙で、「技法的には一歩進化しています。特に第1楽章と二つのスケルツォに満足しています」と自信のほどを示している。

本作は、チャイコフスキー唯一の長調を基調とした交響曲であり、唯一の5楽章構成の交響曲でもある。ただ、第1楽章の序奏や第3、第4楽章など短調の場面も多く、また第2、第4楽章はドイツ音楽の影響が色濃い（打楽器がティンパニのみの交響曲は、6曲中やはり西欧的な第5番と本作のみ）。つまり多様な音楽が並んだ組曲風の交響曲で

あり、その多彩さと豊かな生命力や明快な旋律美が魅力をなしている。なお、タイトルは作曲者の命名ではなく、第5楽章がポーランドの民俗舞曲ポロネーズの様式で書かれていることによる。**第1楽章** 序奏とアレグロ：モデラート・アッサイ（葬送行進曲のテンポで）～アレグロ・ブリランテ 序奏はニ短調の葬送行進曲。主部は明るい第1主題と哀感漂う第2主題を軸に、活気に充ちた展開を遂げる。

第2楽章 ドイツ風に：アレグロ・モデラート・エ・センプリチェ 第1のスケルツォに相当する楽章。ワルツの原型とされる独逸系の田舎風舞曲レントラー調の主部に、軽快なトリオが挟まれる。

第3楽章 アンダンテ：アンダンテ・エレジアコ 叙情的な間奏曲風の緩徐楽章。

第4楽章 スケルツォ：アレグロ・ヴィーヴォ 軽妙な主部に行進曲調のトリオが挟まれる。

第5楽章 フィナーレ：アレグロ・コン・フォーコ（ポロネーズのテンポで）力感溢れるポロネーズ主題部に二つの副主題部が挟まれた後、フーガに発展し、華やかに結ばれる。

楽器編成／フルート2、ピッコロ、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、弦五部

ブラームス ピアノ協奏曲 第2番 変ロ長調 作品 83

作曲：1878～81年／初演：1881年11月9日、ブダペスト／演奏時間：約46分

ヨハネス・ブラームス（1833～97）は、10歳で独演会を開くなど早くから優れたピアノの腕前を誇っていた。その後、音楽教師として名高いマルクスゼンに師事。本日演奏されるピアノ協奏曲第2番は、マルクスゼンへ捧げられた作品である。

ブラームスは、2曲のピアノ協奏曲を書き上げた。第1番の初演（1859年）では、ことごとく酷評を受け、ブラームスは強いショックを受けた。それから19年を経て、彼は1878年に第2番の創作を始め、81年に完成させた。

音楽評論家ハンスリックが、この協奏曲について「ピアノをもつ交響曲」と述べているように、壮大なスケールと華麗な響きは交響曲にも匹敵する。このピアノ協奏曲は旧来の3楽章構成ではなく、交響曲を思わせる四つの楽章からなる。また、第2楽章にスケルツォが置かれているのは当時としては珍しい。そしてピアノ独奏の演奏技術の難

しさも特筆すべきであり、クララ・シューマンも演奏の困難さを指摘している。

第1楽章 アレグロ・ノン・トロッポ 変ロ長調 ホルンの牧歌的な動機で曲は始まり、ピアノ独奏がホルンに相づちを打つように現れる。この第1楽章は、おそらく19世紀のピアノ協奏曲の中でも最も高度な演奏技巧が求められる作品のひとつで、重厚かつ華麗な楽想をもつ。

第2楽章 アレグロ・アッパッショナート ニ短調 冒頭からピアノがほの暗いパッションを漲らせる。雄々しく生氣あふれるスケルツォ楽章。

第3楽章 アンダンテ 変ロ長調 チェロ独奏の奏でる主旋律を、ブラームスはのちに自らの歌曲〈私の眠りはますます浅くなり〉（作品105-2）へ転用している。

第4楽章 アレグレット・グラツィオーソ 変ロ長調 生き生きとした躍動感と壮麗な演奏技巧が映えるロンド楽章。

楽器編成／フルート2（ピッコロ持替）、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、ティンパニ、弦五部、独奏ピアノ

ワーグナー 舞台神聖祭典劇〈パルジファル〉から 第1幕への前奏曲、“聖金曜日の音楽”

作曲：1877～82年／全曲初演：1882年7月26日、バイロイト／演奏時間：約13分、約11分

リヒャルト・ワーグナー（1813～83）はライプツィヒ出身の作曲家で、オペラを創作の中心に据え、現在に至るまで強い影響力をもっている。その作曲に際して、彼は自ら台本も手掛け、ドイツの古い叙事詩や北欧神話、そしてギリシャ神話も取り入れ、壮大な物語を作り上げている。さらに彼は「総合芸術」の思想に基づき、音楽や文学、美術、演劇などを融合しようとした。

ワーグナーの最後の楽劇〈パルジファル〉は、舞台神聖祭典劇と彼が名づけたように、通常の舞台芸術とは異なり、カトリックやプロテスタントにとどまらず、仏教の概念も融合されている。聖杯城の伝説の点で、この楽劇は旧作の〈ローエングリン〉とつながりをもつ。聖杯城では、イエス・キリストにまつわる聖杯と聖なる槍が護られていた。ところが、妖術使いクリングゾルによって聖なる槍を奪われ、彼を成敗しに行った王、アムフォルトスはわき腹を刺されてしまう。そこに無垢なパルジファルが現れ、槍を奪還すべ

くクリングゾルのもとへ行く。クリングゾルが魔法で繰り出す女クンドリの誘惑にも、パルジファルはまったく動じない。槍を奪還したパルジファルは洗礼を受け、聖杯城の騎士となった。

第1幕の前奏曲は、冒頭にゆったり示される「^{せいさん}聖餐の動機」を含む主題と、堂々とした「聖杯の動機」、金管楽器が鳴り響かせる「信仰の動機」による主題を軸としている。

また、“聖金曜日の音楽”は第3幕で演奏される。聖金曜日とは、イエスがはりつけの刑に処せられた日であり、キリスト教において特別な日とされており、受洗したパルジファルはクンドリの洗礼を行う。本来、歌（パルジファルと聖杯守護団の老騎士グルネマンツ）をともなう場面であるが、本日は管弦楽のみの音楽で演奏される。朝日を浴びて清らかな光を放つ森を見るパルジファル。「祝福の動機」が美しく奏されるこの場面は、クライマックスのひとつであり、グルネマンツは聖金曜日の奇跡と讃える。

楽器編成／フルート3、オーボエ3、イングリッシュ・ホルン、クラリネット3、バスクラリネット、ファゴット3、コントラファゴット、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、弦五部

ワーグナー 楽劇〈ワルキューレ〉から“ワルキューレの騎行”

完成：1856年／全曲初演：1870年6月24日、ミュンヘン／演奏時間：約5分

歌劇〈タンホイザー〉序曲

作曲：1843～45年、初演：1845年10月19日、ドレスデン／演奏時間：約14分

ワーグナーは、26年もの歳月をかけて〈ニーベルングの指環〉(序夜、第1～3夜)を完成させた。本日演奏されるのは、第1夜〈ワルキューレ〉(全3幕)の名場面。ワルキューレとは、主神ヴォータンと知の女神エルダの間に生まれた9人の娘たちであり、戦死した勇者の魂を天上界にあるヴァルハラ城へ運ぶ乙女たちのこと。ブリュンヒルデは、その中心人物である。台本も手掛けたワーグナーは、北欧神話からこの題材を取り入れた。

この楽劇では、ジークムントがフンディングの妻ジークリンデに再会し、心奪われるところから始まる。二人はヴォータンが人間に生まれ、生き別れになっていた双子の兄妹。フンディングはジークムントが敵であることを知り、二人は対決する。ジークムントはフンディングの槍に刺されて絶命する。ブリュンヒルデは、ジークリンデがジークムントとの子ども(ジークフリート)を宿していたことを知り、彼

女を森へ逃がす。

第3幕冒頭に演奏される“ワルキューレの騎行”の音楽に乗って、ワルキューレたちは岩山に集う。音楽は、分散和音を中心とする荒々しく力強い楽想で、金管楽器による壮麗な響きが印象的だ。

歌劇〈タンホイザー〉(全3幕)は、女性による救済をテーマとする。吟遊詩人タンホイザーは、官能の世界ヴェーヌスベルクで愛の女神ヴェーヌスと過ごしていた。やがてヴァルトブルクへ戻った彼は、城で開催された「愛の本質について」をテーマとする歌合戦に参加した。保守的な愛を歌う騎士の多いなか、タンホイザーは官能の愛を歌う。激怒する騎士たちから彼をかばったのは、領主の姪エリーザベトである。領主はローマへ懺悔の旅を命ずるも、結局、教皇はタンホイザーを許さなかった。彼女は自らの命を犠牲にし、彼を救う。

序曲は基本的に三部形式。荘重な巡礼の合唱の音楽に、欲情的なヴェーヌスベルクの音楽をはさんでいる。

楽器編成／【楽劇〈ワルキューレ〉から“ワルキューレの騎行”】フルート2、ピッコロ2、オーボエ3、イングリッシュホルン、クラリネット3、バスクラリネット、ファゴット3、ホルン8、トランペット3、バストランペット、トロンボーン4、チューバ、ティンパニ、打楽器(小太鼓、トライアングル、シンバル)、ハープ2、弦五部 【歌劇〈タンホイザー〉序曲】フルート3(ピッコロ持替)、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器(シンバル、トライアングル、タンブリン)、弦五部

7.12 [水]

柴辻純子(しばつじ じゅんこ)・音楽評論家

ハイドン

歌劇〈真の貞節〉序曲

作曲：1778年／初演：1779年4月25日、エステルハーザ／演奏時間：約7分

ホルン協奏曲 第1番 ニ長調

作曲：1762年／初演：不明／演奏時間：約17分

オラトリオ〈トビアの帰還〉序曲

作曲：1775年、1784年(改訂)／初演：1775年4月2日、ウィーン／演奏時間：約6分

トランペット協奏曲 変ホ長調

作曲：1796年／初演：1800年3月28日、ウィーン／演奏時間：約13分

フランツ・ヨーゼフ・ハイドン(1732～1809)は、1766年にハンガリーの大貴族エステルハージ侯爵家の楽長に就任した。長年にわたってその地位を務め、侯爵家の当主で熱心な音楽愛好家だったニコラウス侯(1714～90)の命を受け、宮廷の音楽活動を管理し、様々なジャンルで数多くの作品を書いた。特に1776年以降は、職務が増え、多忙をきわめた。離宮エステルハーザの歌劇場でオペラが本格的に上演されるようになったからで、そこではハイドンの新作をはじめ、チマローザやパイジェッロら当時人気の作曲家たちのオペラが上演された。公演数が年間

100回以上に及ぶ年もあり、それらすべての公演を監督し、指揮を行うのもハイドンの職務だった。

ハイドンは13曲のオペラを残している。今日では〈月の世界〉や〈騎士オルランド〉〈アルミーダ〉などが舞台にかかることもあるが、その他はオペラとして上演される機会はきわめて少ない。ハイドンにとって8作目となる歌劇〈真の貞節〉は、ヴェネツィアの劇作家ゴルドーニの戯曲をもとにした全3幕のドラマ・ジョ・コーゾ(喜劇的な明るいオペラ)で、1778年に作曲された。その冒頭に置かれた序曲は、快速で強弱の対比が鮮やかな前半(変ロ

長調)、ニュアンス豊かな中間部(変ホ長調)、軽やかな終結(変ロ長調)の3部分から成る。なおこのオペラの楽譜は、初演の7か月後の1779年11月の歌劇場の火災で焼失したため、現在の楽譜は、1785年4月の再演の際にハイドン自身が復元したものである。

ハイドンが初めてエステルハージ侯爵家に迎えられたのは、1761年のことだった。副楽長として老齢の楽長ヴェルナーを補佐する役目が与えられ、創作においてはヴェルナーは宗教音楽の分野を、ハイドンは世俗音楽の作曲を任された。この副楽長時代に弦楽器や鍵盤楽器、管楽器のための協奏曲をいくつも手がけたが、楽譜が現存するのはホルン協奏曲第1番だけである。

この協奏曲がどのような経緯によるものか明らかではないが、独奏ホルンが華やかに活躍することから名手のために書かれたことは想像に難くない。エステルハージ宮廷楽団の第1ホルン奏者クノーブラオホや、のちにモーツァルトの創作に大きな影響を与えるヨーゼフ・ロイトゲープの可能性が指摘され、音楽学者のランドンは、ロイトゲープのエステルハージ宮廷楽団への就職祝いとして書かれたと推測している(しかし1か月で解雇された)。いずれにせよ作曲を急いでいたようで、最終頁でヴァイオリンとオーボエの譜表を入れ違い、余白に「居眠りしながら

作曲」と断り書きを入れたことは有名である。全体は3楽章構成でオーケストラの管楽器は2本のオーボエのみ。各楽章の最後に独奏ホルンのカデンツァが置かれている。

第1楽章 アレグロ、ニ長調 管弦楽の主題提示に続いて、独奏ホルンが分散和音に基づく第1主題と大らかな第2主題で登場する。**第2楽章** アダージョ、イ長調 穏やかな独奏ホルンの旋律を弦楽器と通奏低音が支える。**第3楽章** アレグロ、ニ長調 管弦楽による主題提示の後、独奏ホルンが快活な第1主題とたっぷりとした第2主題に装飾的な音型を加えて現れる。

ニコラウス侯は、冬の間こそウィーンの宮殿に移るが、アイゼンシュタットの居城や離宮エステルハーザの滞在が長く、ハイドンも1年の大半をその地で過ごした。一方、ウィーンでは1771年に音楽芸術家協会が創設され、毎年四旬節と待降節にイタリア語のオラトリオが演奏されていた。ハイドンは、遠くなってしまったウィーンで活躍することを夢見ながら、この協会に入会する目的で初めてのオラトリオ〈トビアの帰還〉を作曲した。旧約聖書外典と呼ばれる「アポクリファ」の中の「トビト書」を題材とし、台本は作曲家ボッケリーニの兄が書いた。序曲は、ゆるやかな序奏(ハ短調)に澁^{はっ}刺^{らっ}とした主部(ハ長調)が続き、すっ

きりとした音楽に劇的な感情の表現が表れる。

1791年にニコラウス侯が亡くなり、宮廷楽団は解散した。ハイドンの楽長の肩書きは保持されたまま職務から解放され、自由な音楽活動が可能になった。2度にわたるロンドン旅行で12曲の交響曲(第93~104番)を完成させ、ロンドンの華やかな音楽生活に刺激を受け、1795年8月末、ウィーンに戻ってきた。ウィーンではエステルハージ侯爵家の新しい君主ニコラウス2世が待っていた。かつての輝かしい伝統を復活させ、宮廷楽団を再建したい若い君主は、ハイドンを再び迎え入れた。毎年1曲ずつミサ曲を作曲することを命じ、職務に忠実なハイドンは、1803年に退任するまで6曲のミサ曲を書いた。晩年は、オラトリオ〈天地創造〉や〈四季〉など声楽作品が多くなるが、ウィーンの宮廷トランペット奏者アン-ton・ヴァイディンガー(1767~1852)の卓越した演奏は、ハイドンを驚かせ、彼のためにすぐさまトランペット協奏曲を書いた。

ヴァイディンガーは、奏者であると同時に楽器の改良にも積極的で、伝統的なナチュラル・トランペットでは不可能だった半音が出せる有鍵トランペ

ットを発明した。この楽器には、管の側面に大きさの異なる孔を押さえる5~6個の鍵(キー)と、調性を変化させるクルックが付いていて、それによって高音域のみならず、低音域の音階や半音階のパッセージも可能になった。ハイドンは、この楽器の特性を生かすためにヴィルトゥオーゾ風の旋律を書き、ヴァイディンガーはさらに楽器の改良に年月を費やし、1800年に新式の楽器でこの曲を初演した。

第1楽章 アレグロ、変ホ長調 独奏トランペットも加わった管弦楽の主題提示に続き、独奏トランペットがのびやかな第1主題とたっぷりとした第2主題を示す。長いトリルやオクターヴ以上の跳躍音程、急速なパッセージなどで華やかに彩られ、最後はカデンツァで締め括^くられる。**第2楽章** アンダンテ、変イ長調 シチリアーナ風の穏やかな流れにのった緩徐楽章。独奏トランペットが、管弦楽と対話しながら細やかな旋律をしっとり歌い上げる。**第3楽章** フィナーレ:アレグロ、変ホ長調 快活なロンド楽章。ロンド主題が管弦楽で提示された後、独奏トランペットにこの軽やかな主題が現れる。新しい主題も加わり、独奏トランペットの名人芸が存分に披露される。

楽器編成／【歌劇〈真の貞節〉序曲】オーボエ2、ファゴット、ホルン2、弦五部 【ホルン協奏曲 第1番】オーボエ2、弦五部、独奏ホルン 【オラトリオ〈トビアの帰還〉序曲】オーボエ2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦五部 【トランペット協奏曲】フルート2、オーボエ2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦五部、独奏トランペット

ベートーヴェン

交響曲 第7番 イ長調 作品92

作曲：1811～1812年、1813年／初演：1813年12月8日、ウィーン／演奏時間：約36分

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン（1770～1827）にとって、1808年の〈運命〉と〈田園〉以来、久しぶりの交響曲となる第7番は、1813年1月に完成した。しばらく交響曲の創作から離れていたのは、社会情勢の変化で貴族からの年金が打ち切られたり、情熱的な手紙が残されている「不滅の恋人」と叶わぬ恋に落ちたりなど、作曲家自身が人生の転機にあったこととも関係しているだろう。しかし、同時に創作において新たな局面を開くには、作曲語法の開拓や発想の転換、それを熟成させる時間が必要であった。

それまでのベートーヴェンは、動機や楽想といった小さな単位を徹底的に組み合わせて交響曲を構築していたが、第7番では旋律のカンタービレな（歌うような）性格を重視し、まとまりのある旋律が主題として用いられた。さらに交響曲に欠かせない構築性を保つためにリズムを前面に出し、音楽的な緊張感と律動感を生み出した。四つの楽章は、それぞれ特徴的なリズムをもち、リズムが動機として楽曲を統一する重要な要素となった。

第1楽章 ポーコ・ソステヌート～ヴ

ィヴァーチェ、イ長調 主和音の強烈な一撃の後、オーボエの旋律が浮かび上がる、ゆったりとした長大な序奏部に続き、フルートとオーボエでリズム動機が強調されるソナタ形式の主部に入る。フルートから始まる軽やかなリズムが生き生きとした第1主題、この主題と性格は近いが、もっと旋律的な第2主題の二つを中心に展開する。

第2楽章 アレグレット、イ短調 この交響曲はいわゆる緩徐楽章をもたず、葬送行進曲風のリズムが反復するこの楽章がその代わりを果たしている。主題部と中間部が交互に現れ、主題部は、変奏を伴って現れたり、フガートを含んで展開するなど実に手が込んでいる。

第3楽章 プレスト、ヘ長調 スケルツォ的な性格をもつこの楽章は、軽やかに疾走する部分と木管楽器の旋律が美しい部分が交替し、対比させられる。

第4楽章 アレグロ・コン・ブリオ、イ長調 ワーグナーが「舞踏のアポテオーゼ（神格化）」と評したように、舞踏の饗宴とも言えるリズムの興奮が高まる華やかな楽章。最後は管楽器の咆哮を合図に圧倒的な高揚を作り出す。

楽器編成／フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦五部